

日本流通学会第37回全国大会統一論題趣意書
「質的・量的流通研究の新たな進展」

2023年4月 プログラム委員会

日本流通学会第37回全国大会は、2023年11月3日（金）～5（日）の3日間、立命館大学大阪いばらきキャンパスにおいて「質的・量的流通研究の新たな進展」を統一論題に掲げて開催される。

研究者は、研究課題を解決するために目的に適した方法を選択し、それを正確に応用して、その研究を成し遂げることが求められる。これは、研究方法が研究の多様性と高質化のカギを握っており、実務的課題を解決する際の重要な要素でもあるからである。学術研究や実務においては、それぞれの研究方法の特性が解析角度や導かれる結論・インプリケーションに与える影響を理解し、1つの方法にとらわれず、多種多様な方法またはツールを適切に用いる必要がある。

流通・マーケティング研究は質的・量的方法を用いて行われているが、研究方法そのものに関する議論は決して多くない。それぞれの研究方法によって導かれた成果にはどのような独自性があり、どのような限界があるのかに関する議論は、研究の進展にとって重要な意味を持つ。また近年、研究手法の多様化によって、学術的にも実務的にも新たな進展がみられる。たとえば、多様な分析ツールを用いて因果関係を定量化する研究がある一方、研究対象の実態や思考を深く掘り下げるためのインタビュー調査や、対象者の書き言葉や話し言葉をデータとして解析するテキストマイニングのような定性的な方法も、われわれの研究では幅広く活用されている。また、ブール代数を基礎にして提唱された解析ツールである質的比較分析（Qualitative Comparative Analysis：QCA）が、量的・質的分析を融合し、定量分析では捉えられない複雑なコンテキストの中で因果関係を表現できる点から注目されるようになった。さらに、IT技術の導入により、大規模データの処理や分析など、高度な実験型研究が実現できるようになったほか、購買及び販売のポテンシャル・データをより正確に捉えられるようになり、研究の精度が高まってきている。このように、研究方法の多様化と進化によって、研究の可能性はますます広がっている。

本大会のパネルディスカッションでは、これらユニークな研究方法を応用して研究や実務を行っているパネリストとともに、学会員の皆様と以下の視点より議論を深めていきたい。

- ① 研究方法と研究成果との関係性
- ② 質的・量的研究方法により導かれる研究成果の特色

③ 多様な研究方法間の補完と今後の流通・マーケティング研究の進展

第37回大会では、流通・マーケティングの実務家および研究者とともに、研究の進展における研究方法の役割について活発な議論を行い、今後の研究において新たな発見をもたらす契機となることを期待したい。

• **基調講演および統一論題の報告**

基調講演（英語講演）：

オークランド工科大学（AUT）准教授 KIM, Jungkeun氏（実験型研究）

統一論題の報告：

- ① 中央大学商学部 教授 井上 真里氏（インタビュー調査）
- ② 滋賀大学経済学部 教授 喜田 昌樹氏（テキストマイニング）
- ③ 立命館大学経営学部 准教授 苗 苗氏（質的比較分析）
- ④ 株式会社インテージ パネル事業推進部 企画統括グループ
杉淵 和平氏
松方 溪太氏

• **パネルディスカッション**

座長： 明治大学経営学部 教授 原田 将氏
中央大学商学部 教授 李 旻泰氏

パネリスト： 中央大学商学部 教授 井上 真里氏
滋賀大学経済学部 教授 喜田 昌樹氏
立命館大学経営学部 准教授 苗 苗氏
株式会社インテージ 杉淵 和平氏 松方 溪太氏

以上